

# 「やもめ」

## —— キリスト教福祉の萌芽 ——

伊 藤 明 生 (東京基督教大学教授)

### I. はじめに

「やもめ」<sup>(1)</sup>という表現は使徒の働き6章で初代教会の歴史に登場するが、6章1節を読む限りでは、エルサレム教会では既に「やもめ」のための制度が確立していたように見受けられる。「そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たち<sup>(2)</sup>に対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎

- 
- (1) 新約聖書では、名詞やもめ (χήρα) は、次の箇所で見られている (計24箇所、総計26回)。マルコ福音書12章40節42節43節、ルカ福音書2章37節、4章25節26節、7章12節、18章3節5節、20章47節、21章2節3節、使徒の働き6章1節、9章39節41節、コリント人への手紙第一7章8節、テモテへの手紙第一5章3節4節5節9節11節16節、ヤコブの手紙1章27節、黙示録18章7節。
  - (2) 「ギリシア語を使うユダヤ人たち」「ヘブル語を使うユダヤ人たち」は邦訳聖書で伝統的に使用されてきた訳語であるが、不適切な日本語表現であろう。前者は οἱ Ἑλληνισταί、後者は οἱ Ἑβραῖοι が訳出されたもので、ユダヤ人を大きく二分する表現であるが、母国語または使用言語だけでユダヤ人が二分されているのではない。眼目は生まれ育ちであって、前者は、いわゆるディアスポラ (離散) のユダヤ人たちのことで、後者はエルサレムおよび、その周辺地域で生まれ育った生粋のユダヤ人を指す。言語のみならず、文化、生活習慣を含めた表現であるが、それだけではなく、主義主張がこめられる場合もある。エルサレム生まれで、エルサレム在住のユダヤ人の中にもヘレニズム文化導入に積極的な人たちはいた。そういう人々のことをヘレニストと呼ぶことはできた。ただ、使徒の働き6章で問題となっているのは、エルサレム出身で今もエルサレムに在住するユダヤ人たちとディアスポラ出身で今はエルサレムに在住するユダヤ人たちとの区別と思われる。双方の間に互いに、ある種の差別意識が働いたことは想像に難くない。

日の配給でなおざりにされていたからである<sup>(3)</sup>。(ἐν δὲ ταῖς ἡμέραις ταύταις πληθυνόντων τῶν μαθητῶν ἐγένετο γογγυσμὸς τῶν Ἑλληνιστῶν πρὸς τοὺς Ἑβραίους, ὅτι παρεθεωροῦντο ἐν τῇ διακονίᾳ τῇ καθημερινῇ αἱ χῆραι αὐτῶν.<sup>(4)</sup>)」新改訳聖書で「毎日の配給」と訳されている原語表現は、ἡ διακονία ἢ καθημερινή である。奉仕を意味する名詞 ἡ διακονία が形容詞 καθημερινός で修飾された名詞句である。形容詞 καθημερινός は「日ごと」を意味する前置詞句 κατὰ ἡμέραν に由来するので、καθημερινός の意味するところは、「日ごとの」である。そのまま訳せば、名詞句 ἡ διακονία ἢ καθημερινή は「日ごとの奉仕」「毎日の奉仕」である。エルサレム教会内でもめ達のためになされた「日ごとの奉仕」を指すことになる。具体的な内容としては、やもめ達が日々の生活で必要とする様々な奉仕が想定される。そして、中心となるひとつの奉仕として食事に拘わることがある、ということで、「配給」と訳出したものと思われる。内容的に少々限定し過ぎた翻訳表現と思われる。いずれにしても、エルサレム教会では、やもめのための福祉制度が確立していたことを想定することができる。これは特筆すべきことかもしれない。いや、それ以上に、そのような制度が設置されたことについて、6章以前には全く言及がないことは何を意味するのだろうか。使徒の働きの著者ルカが書き記す必要を覚えない程、自然な成り行きであった、ということか。本稿では、旧約聖書から始めて、やもめという存在が聖書で描かれている世界で、どのように位置付けられているかを先ず見ることにする。その上で、新約聖書では、どのような制度が「やもめ」のために設けられていたのか、探っていきたいと思う。

---

(3) 新改訳聖書による。

(4) 直訳では、「これらの日々に、弟子たちがふえて、ヘレニストたちが、自分たちのやもめたちが毎日の奉仕でおろそかにされていたので、ヘブライストたちに対してぶつぶつ不平を言っていた。」となる。

## Ⅱ. 社会的弱者としてのやもめ

使徒の働き6章に言及される教会内のやもめ達のための「日々の奉仕」を理解するには、古代社会全般での位置付けを確認する必要がある。古代社会全般では、女性の地位は一般的に低いものであった。そして、夫に先立たれた未亡人たちは、往々にして日々の暮らしにも困る現実があった。そこで、若いやもめであれば、再婚するのが一般的な生き方であり、やもめに身寄りがいれば、親戚縁者が面倒を見ることが、当然のこととして期待された。

旧約聖書で有名なやもめの一人は、創世記38章に登場するユダの嫁タマルである。タマルはまず、ユダの長男エルの妻として迎えられるが、エルは主の逆鱗に触れて殺される。そこで、長男の名を残すために、次男オナンの妻となる。これは、申命記25章5節6節などに言及がある「レビレート婚」という制度である。ところが、次男も主の逆鱗にふれて殺されると、三男のシェラも殺されるといけないと恐れて義父のユダはタマルを実家に帰らせた。そこで、嫁のタマルは実に大胆な行動に出た。妻に先立たれた義父ユダとの間に跡継ぎを設けるべく、ユダの前に遊女として現れて寝たのである。夫の父親と肉体関係を持つことは、旧約聖書で禁じられており、聖書の性道徳から逸脱している<sup>(5)</sup>。しかし、夫に先立たれたやもめにとっては夫の名前を残すことが最優先課題であった。タマルは手段を選ばなかったが、やもめとして果たすべき努めを最優先にした。このことが評価されたのであろう<sup>(6)</sup>。義父ユダがタマルを実家に帰らせたことは、やもめの弱い立場が反映している。夫に先立たれた嫁を実家に帰すとは、結局他の家に嫁ぐように促すことをも意味した。

(5) ただし、このことを禁じている旧約聖書の箇所であるレビ記18章15節では、「あなたの嫁を犯してはならない。」(新改訳)とあくまでも義父の側が禁止されている。男尊女卑の時代背景が反映しているものと思われる。新改訳聖書で「犯す」と訳されている表現は、直訳すると「裸を露わにする (תגלה ערוטה)」である。

(6) そのお陰で、イエスの系図にも名を残すこと(マタイ福音書1章3節)になった、と言っても過言ではない。

やもめは、社会的弱者であり、社会的に認知されていなかった、と言えよう。

ルツ記では、姑ナオミと嫁ルツという二人のやもめの苦労が物語られている。ナオミもルツも夫に先立たれた未亡人ではあったが、二人の間で大きく異なったのは年齢であった。もう一人のやもめ、ルツの弟嫁も登場するが、義母と兄嫁に別れを告げて故郷に留まることを決断して実家に帰る（そして、再婚したことであろう）。ルツは故郷を捨てて姑ナオミに仕える道を選んだ。ルツの大いなる決断と覚悟とは『あなたの民は私の民、あなたの神は私の神』（ルツ記1章16節）という言葉に集約されている。ユダヤで貧しい者たちが生きる手段は落ち穂拾いであった。ナオミがしていないところを見ると、落ち穂拾いもハードな高齢になっていたのかもしれない。促されるままルツが実家に帰ってしまっていたら、ナオミは一体どうしたのであるだろうか。モアブの野から故郷ベツレヘムに戻ってきたナオミには生活の術がなかった。生きる唯一の手立ては、落ち穂拾いであった。収穫の際に、畑の隅を刈り取らないで、落ち穂を意図的に残すことが旧約聖書律法で命じられている（レビ記19章9節10節, 23章22節, 申命記24章19節～22節）。いわば公的「福祉制度」として機能していた。レビ記の規程では「貧しい者と在留異国人のために」とだけ記されているが、申命記では在留異国人、みなしご、やもめと「貧しい者」がより具体的に説明されている。ルツは、近親者ボアズの畑で落ち穂拾いをし、結果的には「買い戻しの権利」を行使してボアズは、ナオミ達の先祖伝来の土地を買い戻してルツを妻とした。こうして、モアブの女ルツは、姑ナオミに仕えただけではなく、夫の名を後世に残すやもめの責任も果たすことができた。ルツのこの偉業は、イエス・キリストの系図に名を連ねることで、賞賛されている<sup>(7)</sup>。

---

(7) マタイ福音書1章5節。イエスの系図には、もう一人、ウリヤの妻バテシェバというやもめが残している（マタイ福音書1章6節）。相手が国王であるとはいえ、夫の死後、夫殺しのダビデの妻になるとは、バテシェバの立場が如何に弱いかが物語ら

イスラエルに大飢饉が起こった際に、エリヤはツアレファテのやもめのところに遣わされた（第一列王記17章）。ルカ福音書4章で指摘されている通りに、ユダヤ人を含めて他にも多くのやもめが当時いた。飢饉など災害が起こり、地域全体に食料が少なくなって、先ず生活に困ったのは、夫に先立たれたやもめとその子供たちであった。イスラエルの神主が、預言者エリヤを取えて、やもめの家に遣わされたことには、やもめが当時の社会の底辺に位置付けられていたからであろう。

在留異国人、みなしご、やもめという人々を特別に保護することが旧約聖書では繰り返されている（出エジプト記22章21節～24節、申命記10章18節19節、27章19節など）。裏返すと、在留異国人、みなしご、やもめは、当時の社会で恵まれない存在であり、経済的にも非力であった。場合によっては、抑圧や差別の対象ともなった。社会的弱者を保護することが社会正義として旧約聖書では強調されている。在留異国人、みなしご、やもめが神の民イスラエルの間でどのように扱われているかが、まさに公平・正義の試金石とみなされた。

新約聖書でもやはり、「やもめ」は社会的弱者、貧困層の代名詞となっている。「やもめ」の家を食い尽くすことが悪の典型として取り沙汰されている（マルコ福音書12章40節/ルカ福音書20章47節）。ナインという町で一人息子に先立たれた未亡人の母親を、イエスは憐れんで、その一人息子をよみがえらせている。夫に先立たれ、一人息子に今先立たれてしまい、生きる術どころか生きる希望さえも、やもめは失いかけていたのであろう。そういうやもめの境遇を同情して（ἐσπλαγχιίσθη）イエスは奇跡を行った（ルカ7章11節～17節）。一人のやもめがレプタ銅貨二枚を献金したところ、イエスは彼女を賞賛している（マルコ12章42節43節//ルカ21章2節3節）。やもめは社会の底辺の貧しい者の代表であり、貧

---

れているように思われる。勿論、夫ウリヤが死んだ経緯をバテシェバがどこまで知っていたか、定かではないが。

しいながらに精一杯献げたことが賞賛の対象となっている。やもめは、貧者、生活苦の代名詞であった。聖書でやもめに言及される場合、やもめの社会的地位の低さ、ひいては生活に伴う苦難が前提となっている。

ルカ福音書18章の「不正な裁判官」のたとえなしでも、当時のやもめの地位が背景となっている。人並みの裁判官であったならば、社会的地位も低く、生活に困っているやもめに憐れみを覚えたことだろう。ところが、この裁判官は「神を恐れず、人を敬わない(τὸν θεὸν μὴ φοβούμενος καὶ ἄνθρωπον μὴ ἐντρέπόμενος)」相当に悪い裁判官であった(2節4節)。やもめの立場に同情しないような裁判官であっても、やもめが執拗に懇願したので、根負けした様子が描かれている。ましてや、天の父なる神は、神の民の熱心な祈りには耳を傾けてくださるに違いない、と結びつけられている。

以上、旧約聖書、新約聖書での「やもめ」を概観すると、やもめとは生活に困った貧しい者の代表的存在と典型的に理解されていたことがわかる。そして、旧約聖書以来の敬虔の伝統には、やもめ、みなしごという社会的弱者を憐れみ、助けることがある。そのような敬虔は、ルツ記の物語に典型的に垣間見ることができる。そして、その伝統は、新約聖書にも受け継がれ、例えば、ヤコブの手紙1章27節に明言されている。さらに新約聖書後の使徒教父文書にも、同様の伝統は受け継がれている。このような伝統の流れの只中で、やもめを助ける制度がキリスト教会で早くから始められていたものと思われる。ただ、言葉や生活習慣の相違、さらには無意識の差別意識などが原因となって、ヘレニストのやもめ達が本来受けるべき「日ごとの奉仕」を受けられないでいたので、対策が講じられた。それが使徒の働き6章の背景であったのだろう。

### Ⅲ. 「やもめ」を巡る制度

「やもめ」達の制度について、パウロは詳細にテモテに指示を手紙で書き送っている。テモテへの手紙第一5章では、教会内での「長老」の役

職と並べて「やもめ」が取り上げられている。そして、名簿を作成することから、既に制度化されていたことを伺い知ることができる。「やもめ」に関する箇所テモテへの手紙第一5章3節から16節は以下の通り。

5章3節 χήρας τίμα τὰς ὄντως χήρας.

4節 εἰ δέ τις χήρα τέκνα ἢ ἔκγονα ἔχει, μαθησάτωσαν πρῶτον τὸν ἴδιον οἶκον εὐσεβεῖν καὶ ἀμοιβὰς ἀποδιδόναι τοῖς προγόνοις· τοῦτο γάρ ἐστιν ἀπόδεκτον ἐνώπιον τοῦ θεοῦ.

5節 ἡ δέ ὄντως χήρα καὶ μεμονωμένη ἤλπιεν ἐπὶ θεὸν καὶ προσμένει ταῖς δεήσεσιν καὶ ταῖς προσευχαῖς νυκτὸς καὶ ἡμέρας,

6節 ἡ δέ σπαταλῶσα ζῶσα τέθηκεν.

7節 καὶ ταῦτα παράγγελλε, ἵνα ἀνεπίλημπτοι ὦσιν.

8節 εἰ δέ τις τῶν ἰδίων καὶ μάλιστα οἰκείων οὐ προνοεῖ, τὴν πίστιν ἥρηται καὶ ἔστιν ἀπίστου χεῖρων.

9節 χήρα καταλεγέσθω μὴ ἔλαττον ἐτῶν ἐξήκοντα γεγυῖα, ἐνὸς ἀνδρὸς γυνή,

10節 ἐν ἔργοις καλοῖς μαρτυρουμένη, εἰ ἐτεκνοτρόφησεν, εἰ ἐξενοδόχησεν, εἰ ἀγίων πόδας ἐνιψεν, εἰ θλιβομένοις ἐπήρκεσεν, εἰ παντὶ ἔργῳ ἀγαθῷ ἐπηκολούθησεν.

11節 νεωτέρας δέ χήρας παραιτοῦ· ὅταν γὰρ καταστρηνιάσωσιν τοῦ Χριστοῦ, γαμῆν θέλουσιν

12節 ἔχουσαι κρίμα ὅτι τὴν πρώτην πίστιν ἠθέτησαν·

13節 ἅμα δέ καὶ ἀργαὶ μαθάνουσιν περιερχόμεναι τὰς οἰκίας, οὐ μόνον δὲ ἀργαὶ ἀλλὰ καὶ φλύαροι καὶ περιεργοί, λαλοῦσαι τὰ μὴ δέοντα.

14節 βούλομαι οὖν νεωτέρας γαμεῖν, τεκνογονεῖν, οἰκοδεσποτεῖν, μηδεμίαν ἀφορμὴν διδόναι τῷ ἀντικειμένῳ λοιδορίας χάριν·

15節 ἤδη γάρ τινες ἐξετράπησαν ὀπίσω τοῦ σατανᾶ.

16節 εἴ τις πιστὴ ἔχει χήρας, ἐπαρκείτω αὐταῖς καὶ μὴ βαρεῖσθω ἢ ἐκκλησία, ἵνα ταῖς ὄντως χήραις ἐπαρκέσῃ.

やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。

しかし、もし、やもめに子どもか孫かがいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。

ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に置いて、昼も夜も絶えず神に願いと祈りをささげていますが、自堕落な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。

彼女たちがそしりを受けることのないように、これらのことを命じなさい。

もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。

やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、

良い行いによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわざに努め励んだ人としなさい。

若いやもめは断りなさい。というのは、彼女たちは、キリストにそむいて情欲に引かれると、結婚したが、初めの誓いを捨てたという非難を受けることになるからで



す。

そのうえ、怠けて、家々を遊び歩くことを覚え、ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいをして、話してはいけないことまで話します。

ですから、私が願うのは、若いやもめは結婚し、子どもを産み、家庭を治め、反対者にそしる機会を与えないことです。

というのは、すでに道を踏みはずし、サタンのあとについて行った者があるからです。

もし信者である婦人の身内にやもめがいたら、その人がそのやもめを助け、教会には負担をかけないようにしなさい。そうすれば、教会はほんとうのやもめを助けることができます。(新改訳)<sup>(8)</sup>

- 
- (8) 直訳すると、「やもめ達を、本当のやもめ達を敬いなさい。もしやもめに子供なり孫がいるならば、その者たちに先ず自分の家族に敬虔に振る舞い、親たちの恩に報いることを学ばせなさい。というのは、これは神の御前に喜ばれることだからです。本当のやもめとは、ひとり残されて神に望みを置いてもいて、昼も夜も願いと祈りに留まってもいる。しかし、ほしいままに生活する者(やもめ)は、生きていても既に死んでいます。彼女たちが責められることがないように、このように命じなさい。もし、誰かが、自分の者たち、とりわけ親族の者の世話をしないならば、(その人は)信仰を否定したことになり、信仰のない者たちよりも悪い。次のようなやもめに登録させなさい。六〇歳を超えた者で、一人の夫の妻だった者で、良い行いで評判が良い、子育てをし、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困った者たちを助け、すべての良い行いに励んだ人ならば(よろしいでしょう)。しかし、若いやもめは断りなさい。というのは、欲にひかれてキリストから引き離されると、結婚したが、最初の信仰を拒んだので、裁きを招くからです。同時に、怠け者で家々を歩き回ることを覚えます。怠け者であるだけでなく、嗜好きで、お節介で、不要なことを話します。従って、若い(やもめ)達は結婚をして、子供を産み、家を取り仕切って、罵倒のために敵対する者に全く機会を与えないことを私は望んでいる。というのは、既に宗旨変えをしてサタンに従った人たちがいるからです。もし、信頼に値する女性(の身内)にやもめがいるならば、彼女(やもめ)達を助けるようにして、本当のやもめを助けるために教会に負担をかけないようにしなさい。」となる。

パウロは、「やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。(χήρας τίμα τὰς ὄντως χήρας.)」という一文でやもめに関する指示を始めている。用いている動詞(τιμάω)から、十戒の第5戒「父と母とを敬いなさい。(τίμα τὸν πατέρα καὶ τὴν μητέρα)」を念頭に置いた表現と思われる。この動詞は、新約聖書全体でも、21回使用されているだけで<sup>9)</sup>、そのうち6回は第5戒の引用である。教会を擬似家族と理解したことに起因するものと思われる。テモテへの手紙第一5章1節2節でパウロはキリスト教会を比喩的に家族と把握しようとしていたことがわかる。

5章1節 πρεσβυτέρω μὴ ἐπιπλήξης ἀλλὰ παρακάλει ὡς πατέρα, νεωτέρους ὡς ἀδελφούς,

2節 πρεσβυτέρας ὡς μητέρας, νεωτέρας ὡς ἀδελφὰς ἐν πάσῃ ἀγνείᾳ.

年寄りをしかつてはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人たちには兄弟に対するように、年とった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。

(新改訳)

3節から16節で書き記されているのは、「本当のやもめ」の資格・条件であって、教会内で「やもめ」集団が何をする人々で、どのような性格の組織を形成するか、一言も言及されていない。そのために、この「やもめ」制度は、奉仕集団であった、と論じる注解者、学者たちもい

---

(9) 箇所は、マタイ福音書15章4節6節8節, 19章19節, 27章9節(2回), マルコ福音書7章6節10節, 10章19節, ルカ福音書18章20節, ヨハネ福音書5章23節(4回), 8章49節, 12章26節, 使徒の働き28章10節, エペソ人への手紙6章2節, テモテへの手紙第一5章3節, ペテロの手紙第一2章17節(2回)。

る<sup>(10)</sup>。実際、パウロが「やもめ」についてテモテに指示している直後の17節以降では「長老」について指示が与えられているが、この「長老」たちは教会内での指導的立場であり、役職と思われる。また、使徒の働き9章36節以降では、ドルカス（またはタビタ）という女性が、良いわざと施しに励んでいたことに言及されている（αὐτὴ ἦν πλήρης ἔργων ἀγαθῶν καὶ ἐλεημοσυνῶν ὧν ἐποίει<sup>(11)</sup>）。ドルカス自身は「ある女の弟子（τις . . . μαθήτρια）」と称されているだけで、やもめであったかどうかは、明言されていない。ところが、やもめたちが、ドルカスが作った衣料品をペテロに見せた、と書き記されているので、ドルカスもやもめの一人であった、と想定できる。でも、「やもめ」という奉仕集団が組織されていた、と想定する必然性はないと思われる。家族などの身寄りがないくて、時間にゆとりがあるやもめたちが、出来る奉仕に励んだ、ということであろう。また、テモテへの手紙第一5章の場合には、奉仕者として「長老」と「やもめ」とが取り挙げられているというよりも、年配者ということ（5章1節2節）で括られていると理解できる<sup>(12)</sup>。「やもめ」が教会で登録される条件として、パウロはテモテに60歳という年齢制限を設定して、家族、親族などの身寄りがないことを挙げている。身寄りがいるならば、身寄りが面倒をみることを期待されている。教会の負担とならないために、本当のやもめだけを登録するようにパウロは

---

(10) Martin Dibelius and Hans Conzelmann, trans. By P. Buttolph and A. Yarbro, H. Koester (ed.), *The Pastoral Epistles: A Commentary on the Pastoral Epistles* (Hermeneia - A Critical and Historical Commentary on the Bible; Philadelphia: Fortress Press, 1972), pp. 73-76. テモテへの手紙第一5章3節～16節と共に、使徒教父文書から、イグナティウスのスミルナ人への手紙13章1節、ポリュカルポスへの手紙4章1節、ポリュカルポスのピリピ人への手紙4章3節を根拠に論じられている。教会の指導的役職と思われる「監督」「執事」「長老」であっても、役職の具体的な勤めは詳説されていない。

(11) 直訳、「この女性は、していた良いわざと施しに満ちていた。」

(12) 新改訳聖書では、5章1節では「年寄り」、17節では「長老」と訳し分けられている。この訳し分けは適切だと思うが、どちらも同じ単語がギリシヤ語原文では使用されている。相違は、1節では単数形で、17節では複数形ということだけである。

指示している。さらに、若いやもめは断るよう指示している。上限ではなく、下限の年齢制限が設定されていることなどから、奉仕を中心とした集団ではなく、ある種の福祉的性格を帯びた集団と理解するのが妥当と思われる。

ディベリウスとコンチェルマンが注解書で使徒教父文書に言及しているが、やもめが奉仕集団であった根拠にはならないと思われる。読者の多くには馴染みがない文書であると思われるので、以下に引用しておく。

スミルナ人への手紙13章1節 ἀσπάζομαι τοὺς οἴκους τῶν ἀδελφῶν μου σὺν γυναιξὶν καὶ τέκνοις, καὶ τὰς παρθένους τὰς λεγομένας χήρας. ἔρρωσθέ μοι ἐν δυνάμει πατρός. [187] ἀσπάζεται ὑμᾶς Φίλων, σὺν ἐμοὶ ὦν.

妻と子供と共に私の兄弟たちの家族とやもめと呼ばれるおとめ達に私は挨拶します。御父の力によって別れを告げる。私と共にいるフィロンがあなたがたに挨拶を送っています。

ポリュカルポスへの手紙4章1節 χήραι μὴ ἀμελείσθωσαν μετὰ τὸν κύριον σὺ αὐτῶν φροντιστῆς ἔσο. μηδὲν ἄνευ γνώμης σου γινέσθω, μηδὲ σὺ ἄνευ θεοῦ γνώμης [194] τι πράσσε, ὅπερ οὐδὲ πράσσεις. εὐστάθει.

やもめ達がないがしろにされないようにしなさい。主の次に、あなたが彼女らの保護者となりなさい。あなたの同意なしには何もなされないように、あなたは神の同意なしには何もしないようにしなさい。これまでそうしてきたように、しっかりとしなさい。

ポリュカルポスのピリピ人への手紙4章3節 τὰς χήρας σωφρονούσας περὶ τὴν τοῦ κυρίου πίστιν, ἐντυγχανούσας ἀδιαλείπτως περὶ πάντων, μακρὰν οὔσας πάσης διαβολῆς, καταλαλιάς, ψευδομαρτυρίας, φιλαργυρίας, καὶ παντὸς κακοῦ, γινωσκούσας ὅτι εἰσὶ θυσιαστήριον θεοῦ καὶ ὅτι πάντα μωμοσκοπεῖται, καὶ λέληθεν αὐτὸν οὐδὲν οὔτε λογισμῶν οὔτε ἐννοιῶν οὔτε τι τῶν κρυπτῶν τῆς καρδίας.

やもめ達は、主の信仰について落ち着いて考え、皆のために絶えず執り成し、すべての中傷、悪口、偽証、金銭愛、そしてすべての悪から離れているべきです。彼女たちは神の祭壇であり、すべてが汚点のないことが確認され、思いも意志も心の隠れたものの何も神から隠れ果せないことを知っている。

イグナティウスのスミルナ人への手紙13章1節、ポリュカルポスへの手紙4章1節、ポリュカルポスのピリピ人への手紙4章3節などで「やもめ」への言及が見出せることを見ると、「やもめ」集団が初代教会に存在していたことは間違いなさそうである。集団の性格としては、奉仕集団というよりも、福祉的面に重きがあったと思われる。勿論、「やもめ」たちが奉仕することも期待されたかもしれない（使徒の働き9章39節41節参照）が、奉仕することが目的の「やもめ」集団ではなく、ある種の福祉的集団として「やもめ」が理解されていたと考える方が自然と思われる。

#### IV. 結論：キリスト教福祉としての弱者救済

やもめは、古代社会では社会的弱者であった。キリスト教会でやもめ

を支援する制度が創設されるようになった経緯は不詳である。旧約聖書の時代から、様々な形でやもめを支援する姿勢が見受けられる。そのような視点の延長線上に「やもめ」を巡る福祉制度がキリスト教会で持ち上げられたと推定することができる。旧約聖書の隣人愛の戒めも、「やもめ」の制度と決して無関係ではないかもしれないが、十戒の第5戒「父と母とを敬いなさい。」こそが明確な背景であったことは見逃してはならないだろう。信仰共同体である教会を擬似家族とみなすことは、「兄弟姉妹」という表現から一般的に見られる。それだけではなく、テモテへの手紙第一5章1節2節から、パウロがテモテにやもめについて指示する際に、明らかにキリスト教会を擬似家族とみなしていたことがわかる。さらに、第5戒と同じ動詞 τιμάω が用いられている。「やもめ」のための制度の中身については記載がなく不詳であることは残念であるが、ある種の福祉制度であったことは間違いないであろう。